拘束
こうそく
ナブラ
女子高生
Adult only

目次

表紙　イラストレーション　流一本

中扉　イラストレーション　流一本

目次　2

こみっく「とくべつ」　流一本　3

SS　どうしてこうなった　白朧　23

奥付

あの…入須先輩本当にいいんですかこんな事…

今さら何を言ってるんだ折木君？

ここはこんなにもガチガチにさせておいて

ギュッ

もしかして他の誰かに罪悪感でも感じているのか？

べ…別にそういうわけじゃ…

ふふ♡

それなら何も遠慮する事はないだろ？

プニ

うっ…

ん♡

れちょ

れちょ

うっ…ああ

ん♡
ん…く
ちゅぽ
ちゅぽ
ちゅぽ

んん♡
んぷ♡
じゅぽ
じゅぽ
じゅぽ
あっ…
あっ…

う…うぅ
せ…先輩…
オレ…
ブルル…

うああ！
ビュビュッ
ああん♡

もうだめじゃないか
ベトベト
髪がベタベタになってしまったぞ♡
ぷ

射精(だ)すならんん♡
コッチにしてくれ♡
ビト

んん♡

硬い…

射精(だ)したばかりだというのに…

あ…あ…先輩…

先輩の…お●んこに挿(はい)ってる…

どうだ？私の…お●んこは…

きゅん♡

はっ…ああすごく…いいです

あっ…あ♡私も…

い…いい♡

気持ちいい♡

い…入須先輩

入須先輩はどうしてオレなんかとこんな…

言っただろう君は特別だと

私は以前君をだまして傷つけてしまったが

これは純粋に君への想いだよ

こん…なにんあ♡一人の男を…想ったのは初めてよ

本当に折木君が好きなの♡

はっ♥

はっ♥

はっ♥

君さえ…望めばああん♡赤ちゃん…妊娠していてあげてもいいわ♡

あ、

あ、

ちゅ♥

ぐちゅ♥

だから…このお●んこもあなただけのものよ

せ…先輩

ちゅるる

もう一度言うわ♡

はぁ♥

はぁ♥

君は私の特別よ♡

折木くん♡

ちゅ♥

ちゅ♥

入須先輩…

んあ♡
ピク♥
折木くんのセーシ♡
ピク♥
あ…ああ…♡
ブルル
なかに…でてりゅ♡
はああ♡
ビュー♥
ビュー♥
はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡

というような出来事がこの映像にはバッチリ映っているのだが

ああ♡

もっと♡折木くん♡

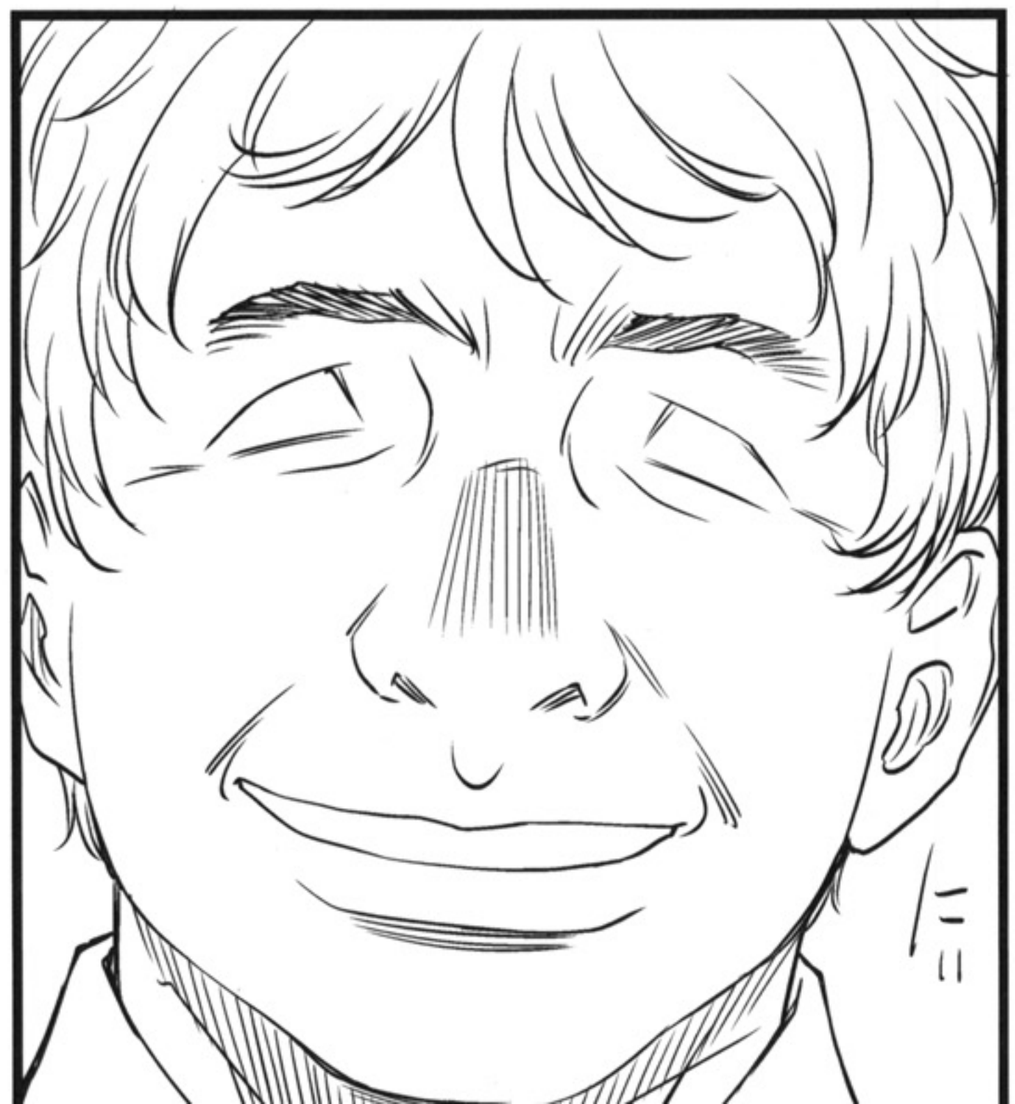
お●んこしてぇ♡

いかんなぁ

君ともあろう者が神聖な学び舎でこんな淫らな事をしては

こんな事が公になっては御家族やこの一年の生徒にも大変な迷惑がかかってしまうよ

それで？先生方は何をおっしゃりたいのです？



おやおや どうした ずい分息が 荒くなったぞ(笑)
ハァ
ハァ
ん…く
別に…大した事…ない
見ろよ このクリトリス こんなに勃起してやがる
ぬちゃ
ぬちゃ
ぴく
ぷるん
ぷるん
ぷるん
ぷるん
さすがに 全身をこれだけ 弄られれば イヤでも 反応するさ
ぴく
ぬちゃ
ぬちゃ
あ…あ
やめ…
や♡
んぁ♡

き…
きさまら…

はぁ

う…

この私に…
こんな事を
して
ただで済む
と思ってる
のか

はぁ

この有り様で
凄まれても
ねぇ

後で同じ事が
言えたら
考えてやるよ

きゅ♥

きゅ♥

ンヒィ♡

ブル

ブル

あっ♡
ああ♡

んほおお♡

お？

ほおおお♡

イってる
イってる

「女帝」と
持てはやされ
ても所詮は
こんなものさ

あ…♡

ああ♡

ま●こを
支配すれば
ただの
メスだからな

はー

はーはー

それじゃあさっそく入須家ご令嬢のお●んこをいただきますか

ま…待ちたまえ…

今ならまだなかった事にするから…

だ…だからお願いだ

ヒク♥

ヒク♥

ブルブル

い…いややめて…

覚悟しなよガキのとは一味違うぜ

やだ…やだぁ助けて折木くん

んあぁ！

あっ

ああっ

おほ～～♡
入須ちゃんの
お●んこ
たまんねぇ♡

な…何コレ…？

か…は

こんな…

あ…
ああ…

お…
お●んこ…
拡がってる…

ぎゅっ♥
ぎゅっ♥

はす
はす
ブル
ブル

た…頼む…
抜いて…くれ
こんなので
かき回されたら…

カキ回
されたら
どうなるん
だ？

するするする

んあ！
あ…ああ…

入り口を
こねまわし
たり…

ヌラ
ヌラ
ヌラ

ひくっ
ひくっ

や…やめ
は…
は…
あ♡

う…

子宮口を
一気に
突きあげ
れば！

ぶち♡

んああ♡

はっああ♡

あ～～ホントにいいま●こしてるよ
子宮口もとろけまくってち●ぽが挿りそうだ
あっ
アン♡
んっあ♡
ああ♡

直接子宮に種づけしてやるからな
い…いやぁ！
やめ…てえ
受精しろよ入須！
妊娠しろ！
うっ…
んぁあっ!?
あ…はぁあ…
ア♥
ア～♥
おお…お…

う…むぅ
フゥ
フゥ
もっと奥まで流し込んでやる…
フゥ
ふ――
でたでた
あ♡
あ～～♡
すぅ
じゃ次オレね
グチャグチャ
あ…あ～～♡
ちゅぱ♥

こりゃ確かにいいま●こしてるぜ

んふ♡

ちゅぽ

ちゅぽ

口ま●こも最高だぜ

んん♡

ふぅう♡

ああん♡

んほおお♡

アナルぅ♡

アナルいくぅ♡

おお♡

あ〜っ♡

いぐ♡いぐぅ♡
肛門イぐ〜ぅ♡

あ…あ♡

チュプ

んおお♡

お…おお♡

勃起ちくび
うまいか

ん♡

んん♡

勃起ちくび♡
おいしい
です♡

ちゅぱ

ちゅぱ

んあぁ♡
ミルク
出ちゃう♡

イイ〜〜っ♡
もっとぉ♡
あへ♡
あへ♡
ち●ぽいいのぉ♡
へへ
もう完全に堕ちたな
意外とあっけなかったな
ち●ぽ♡♡
ち●ぽ♡♡
キス♡キス♡
キスぅ♡
んぉお♡んきゅうっ♡
私の子宮ガバガバになっちゃうぅ♡
オオ♡
もっどぉ♡
もっと肛門壊じてぇ♡
ジヒイイ♡

おっ…♡
おお♡
あ〜〜〜♡
ビク♥
ビク♥
ビク♥
ズルズル
ズルズル
ビク♥

あーもうケツん中ズルズルになってるわ
ズルルル
ビク
こっちはカリが子宮にひっかかって抜けなくなっちまった

かまわねぇから一気に引き抜いちまえ！
よし！
あお…
あえぇ…

おひぃぃ♡
ボォォ
ボォォ

あーあ
子宮がとび出て
丸見えだよ

こりゃもう
●校生の
ま●こじゃ
ねえな(笑)

ぶるぶる

ぶるぶる

ぴろぴろ

おお〜♡

肛門も裏返って
べらべらに
なっちまったけど
大丈夫かコレ？

ちぽ●ぽ挿れ
すぎてもう
グニャグニャだ

お…♡

おふぅ♡

おもしれぇから
そのまま上に
向けろ

おっ
アレを
やりますか

あ…あ？

や…
らめぇ…

お♡

ぴゅ♥

ぴゅ♥

ぴゅ♥

おほおお♡

[redacted]

すまない折木君

どうやら君は私の特別ではなくなったようだ

あへえ♡

私の特別はもう…

もうすぐ出産予定日だが大丈夫なのか？

ん♡

ん♡

ちゃんと入須家の息のかかった病院を用意しておいたから問題ないさ

んむ♡

そういえば知ってたか？

お前が捨てたあの折木って奴千反田ん家とこの娘に手を出して町を追い出されたってよ

ああ何をトチ狂ったのかバカな奴だ

どうしてこうなった

「どうして、こうなった」

今日は、千反田の家に呼ばれた。出迎えた、えるは、大正の女中（メイド）姿していた。

「ほら、折木さん、どうですか？」

桜色の猫足絣の柄の着物に紺の袴、袖なしの白いエプロンをつけて、頭の上には白いフリルのついたカチューシャだ。恐ろしく破壊力のある姿だった。千反田の手料理をご馳走になることになり、その祭、千反田はメイドを楽しんで甲斐甲斐しく世話をやく。奉太郎は、メイド姿のえるを見ると、劣情が抑えきれなくなりそうで、極力、視界に入れないようにしていたが、えるの世話焼きは段々エスカレートしていった。

「折木さんは、興味がないんですかッ？」

「そ、そんなことは……」

奉太郎の視界一杯にえるの顔が迫ってくる。

「わ、私には魅力がないんでしょうか？　こんなに折木さんに興味があるのにッ！」

えるは慌ててエプロンを取り払うと、ゆっくりと椅子の背にかけた。

そして、ぐいっと襟を開き、ブラジャーのフロントホックを外す。

「えッ？　まてッ……」

ブラジャーのカップが左右に分かれ、内側に収められていたまっ白なボリュームのある乳房がたゆんとこぼれる。甘い香りが鮮明に立ちのぼった、えるの肌からこぼれる体臭が香る。奉太郎は、慌てて背を向ける。

「こっちを向いてください」

奉太郎の座っている椅子の前に回り込むと、奉太郎の前に跪き、ファスナーをぐいと引き下ろし、男根を取り出した。

「もう少し浅く座ってください。少し、やり辛いです」

奉太郎は徐々に立ち込める。千反田えるの女の芳香に逆らえず、ゆっくりとした動きで座り直した。えるは半勃起状態の男根の先端を指先で掴み引っ張り上げると、乳房を下から持ち上げるようにして、胸乳で肉茎を挟んだのである。

「うっ、うぅっ、ち、千反田……」

ボリュームのある乳房のたゆんとした感触と、えるの体温が、奉太郎の肉棒を両脇から挟み込んで押し付けてくる。えるの乳房はいかにもふんわりと柔らかそうに盛り上がっているのに、実際は張りがあり、かなりの圧迫を肉棒に与えてくる。

それでいて、胸乳の谷間は引き締まり、うっすらと最低限の脂肪しかついていない。

「んんっ……はぁはぁっ、う、くぅッ、くッ、ふっ……あっぁぁ」

えるはぎゅっぎゅっと力を入れて乳房を押し揉んでいる。乳房に指がめりこみ、ピンクの痕がつくほどだ。

「はっ、お、折木さん、気持ち…、いい、ですか？」

「あ、……き、気持ちいいよ」

裏筋の感じやすいところが、谷間に押し付けられ、擦られて小刻みに刺激を与えられる。乳房が目の前にクニュクニュと歪み、ふくよかな稜線を引く谷間から、頭を出した亀頭が左右に振れる。先端の肉の実が濃いピンク、猫足絣の柄の着物も同じく濃いピンク色の間に挟まれた乳房の白い肌が眩しいほど際立って見える。

しかも、えるの欲情に歪む、淫靡な表情を浮かべる貌が妖しさを醸し出す。

「んっ、んっ、あぁぁ……、んあぁッ！」

えるは指に力を込めて乳房を押し揉んだ。揉めば揉むほど、感じれば感じるほど乳房が重く感じる。物理的ではなく、内側から湧き上がる甘く痺れる疼きが、重さを増したかのように感じさせるのだろう。

「はぁ、おっぱいが、か、感じて……、どんどん、重くなってくますっ」

「はぁ、パイズリが、こんなに、気持ちいいなんて……」

奉太郎の男根を胸の谷間に感じながら、自分で乳房を揉みしだくのは、どんな器具を使ったオナニーより気持ちよく感じられた。奉太郎が感じて歪ませる顔も、自分の胸乳の谷間から覗かせる亀頭も愛おしく見えてくる。男を悦ばせるという充足感だろうか。

「あぁっ、あっ、んっ、んんッ……、はぁッ」

おっぱいの内側がキュンキュンして、その疼きは体内を経由して子宮に到達する。
(あぁ……、子宮が疼いてきました)
子宮の疼きは、女の躰が男を受け入れる準備が整えて発情し始める。一旦始まると、痛いほどの躰の甘い疼きは精液を受け入れるまで収まらない。奉太郎のペニスは、徐々に硬くなってくる。この肉棒を膣内に収めたいという欲求が湧き上がってくるが、それをぐっとこらえる。
早急に受け入れるより、我慢した方がより昂まることが経験からわかっていた。

奉太郎は、内から出る欲求に耐えていた。千反田の悶える貌はその欲求を加速させる。千反田のだんだんと激しく揺れる、柔らかな双丘を見ていると新たな欲求が湧き上がってきた。
「……縛りたい」
ふと、その欲求が口から溢れる。すぐさま口を抑えるが、溢れたものは取り返しがつかなかった。
「え……?」
その声に反応して、えるは乳房を押し揉むのを止め奉太郎を見上げる。
「縛る……」
その意味を吟味して、理解した頃には、千反田えるの瞳は、例の光を溢れさせていた。
「折木さん、私、気になりますッ!」
えるは身を乗り出した。その拍子に手が、局部を擦る。
「うっ……」
突然与えられた、方向性の違う刺激に、危うく精を放ってしまいそうだった。
「あ、すいません」
えるは、奉太郎の表情と、局部を見比べて、くすりと口を緩ませた。身を乗り出した拍子に胸にかかった黒髪を背中の方へ追いやった。再度、奉太郎の肉茎を乳房で挟みなおす。揺するようにして刺激を与え始める。先ほどとは代わり、もどかしいような、しかしおだやかな興奮が、奉太郎に満ちてくる。えるは、乳房を内側にキュウッと寄せると、首を真横に倒し、胸乳の谷間から顔を覗かせている亀頭に舌を這わせた。唾液を纏った熱い舌が、剥けた先端を刺激する。敏感な部分なので舌の味蕾の刺激がたまらなく感じる。
「うっ!」
えるの舌は尿道口に差し込まれ、間断なく刺激を送ってくる。ちゅっと先端部分にキスをして、また亀頭部を舌で舐めまわす。
「うッ、ううっ!」
奉太郎はあまりの快感に腰をひねった。
亀頭が舌先でぬるぬると舐め回され、裏筋は胸の谷間との間で、溢れてきた唾液を潤滑油にして擦られている。奉太郎の快感はすぐに昂っていく。両脇から押さえつけられた胸乳と谷間で圧迫され、今にも決壊しそうなダムような高まりになっている。
「うっ、ううぅ、ふぅッ!」
「れろっ……、ん、んん……。はぁ……、んッ」
えるは、なおも激しく舌を使った。唇を尖らせてキスする感触も、舌を大きく出して亀頭を舐めしゃぶってる感触も、奉太郎の快感を増幅させていく。えるは、口を大きく開け。亀頭を咥えるように吸い付いてきた。突然始まったバキュームに、肉棒は決壊した。
ドブッ!
突然襲ってきた高波のような心地よさに身をゆだねる。
「ご、ごめんッ!」
パイズリで射精したせいで、えるの口腔だけでなく、鎖骨や乳房にまで精液のシャワーで汚してしまう。
「きゃっ、……んん、くちゅっ、ちゅぱっ、んっ……、はんッ」
えるは射精中のペニスを精液を搾るかのように舐め回した。
「うわっ……くぅ」
射精の最中で敏感になっている亀頭を、熱い舌が舐めしゃぶる感触は、おそろしく気持ちよかった。さらなる快感に射精の勢いがいっそう強くなっていく。
ドブッ、ドクドクッ
えるの綺麗な顔が、精液で汚れていく。うっとりと目を細めた表情が淫靡だった。
「う、うぅ……」
「くちゅっ、……ちゅぱぁっ、んんっ」

顔に精液が掛かるのに一瞬躊躇したが、えるはすぐに先端を浅く咥えた。そして、口腔に溜まる精液をちゅるちゅるを啜り上げていく。
「ち、千反田ッ」
奉太郎は、悲鳴のような声を上げて腰をひねった。
えるがごくんと嚥下するとき。口腔が狭くなって亀頭が圧迫される。しかも奥へと吸引される。口唇いっぱいに白い精液が溜まっている様子も、口の端から溢れる様子も、おそろしく淫靡に見える。えるがごくんと喉を鳴らして口腔内に溜まっていた精液を飲み込んだ。そして、立ち上がって髪を振ると、はふぅん、と色っぽくため息をつく。
「……ん、おいしいです…」

えるの着物の袴を縛っていた腰紐を、乳房の前後に巻きつけて引っ張り、胸の真ん中に蝶結びを飾る。赤い紐が白い胸元に愛らしく飾られて、乳房がいっそう大きく突き出した。大きくゆるんだ着物の衿から、両の乳房が出ているだけでもたまらないのに、赤い腰紐で前後を戒められている。扇情感を煽る光景だ。
「折木さん……」
えるは目を赤く染め、うっとりした顔で熱い息を吐き、両手を揃えて差し出した。
「……うん」
奉太郎はごくりと口内に溜まった唾液を嚥下し、ゆっくりとえるの手首に腰紐を巻きつけていく。紐が長く残っていて、ふと天井近くの梁が目に付く。視線に釣られてえるも視線を天井近くの梁に向ける。
「私……、気になりますッ」
近くの椅子を引き寄せ、天井の梁から出ているフックにえるの両手に繋がる紐を結びつける。足が簡単に着く高さで、吊っていると言い難いが、その光景はエロティックな雰囲気を醸し出す。袴も足袋もきちんと纏っているのにやたらと扇情的だった。
「あっ、あああっ」
五十センチの竹尺がえるのお尻を撫でるたび、まだなにもしていないのに、叩かれる想像で躰がブルブル震えてしまう。

「よっ」
奉太郎が竹尺を振り下ろす。パシンと子気味よい音と共に、袴の上から左の臀部に衝撃が走った。感電したように震えた。子宮が揺すられて、キュンと甘く疼いてしまう。
「きゃッ」
「だ、大丈夫か……？」
「平気です」
「そ、そうか……」
奉太郎は、竹尺の角でゆっくりとえるの体をなぞっていく。背中、脇、脇腹、臀部へと。先ほど打ち付けた臀部の赤い筋の所までたどり着く。
「あっ、あああーっ」
叩かれて敏感になったところに触れられて、ゾクリとくる戦慄がえるの背筋を走り抜けていく。子宮まで反応して感覚が弾ける。子宮頸管粘液がドブリと出て、ショーツの内側を濡らす。奉太郎はチーズケーキのような匂いに気づいた。えるの躰は刺激によって反応していた。目尻がピンク色に染まり。乳首がツンと尖り、赤いテカった舌が唇を舐める。子宮の発情に、腰を揺らしていた。奉太郎は、そのえるの痴態に抑えられなくなったいた。
竹尺を先ほどより力を込めて振るった。
「きゃあっ、きゃあっ、ああぅ、だ、ダメですっ！」
竹尺が臀部に当たり、その弾力を腕に伝える。その手応えは甘露のように感じられた。
「あああ、んっ、……はぁ、何か、くるぅ」
えるはその場で脚をばたつかせ、身を捩り、腰を捻り、乳房を揺らしながら悶える。唇の端からは涎が零れる。
「い、痛いッ！」
痛覚を伝える悲鳴に、奉太郎は少し冷静さを取り戻す。
「あ、ご、ごめん……」
竹尺を放り出し、えるの体を支える。しかし、その手が袴の上からお尻を撫でたとき、いきなりえるが震え出した。
「あああああっ！」

爪先立ちで伸び上がり、背筋が反り返る。そして、そのまま硬直した。足袋の間にたらりと愛液が垂れた。溢れた愛液が、ショーツを浸透し、足を伝い零れてきた。

「イったのか……」

一瞬、あっけにとられた奉太郎は、えるがどういう状態になったのかを理解した。やがて硬直が解け、えるが目を開いた。

「ああ、折木さん……、欲しいです…」

とろんとした目付きで、おねだりをしてきた。

「ほ、ほしいって……」

「折木さんの、精液が、……欲しいです」

目は焦点があってないように見える。しかし、それゆえ女の本能に従った言葉だった。

奉太郎の方も、これ以上我慢できる状態などではなかった。少しの躊躇いのあと、えるの袴の紐に手をかけ紺色の袴を脱がす。猫足絣の柄の着物一枚と、乳房と手首に結ばれた腰紐、愛液を溢れさせたショーツ、そして足袋。それだけがえるの身に残されていた。着物の前ははだけ、乳房はもちろん平らなお腹も、ショーツに包まれた股間も白い太腿からすらりとのびた足もさらけ出していた。ショーツをめくると、チーズのような興奮をそそる匂いが立ち上る。内股で下肢をすりあわせているのでおろしにくいが、ぐっしょりと濡れたショーツは、捻れながらつま先から引き抜かれた。

「膝、あげて」

太腿を叩いて催促すると、えるは右足を上げる。その拍子に蜜液がポタポタと滴る。

「あ、だ、ダメですッ！」

えるが内股にしていたのでわからなかったが、秘芽は勃起して大きく膨れ、秘唇は発情して真っ赤に染まっている。しかも、ヘアが蜜で恥丘にはりつき、内腿はドロドロに濡れていた。奉太郎は、我慢できず、亀頭を斜め下からあてがった。

えるの右太腿に腕を絡めて支えながら挿入する。

「ああっ、あーっ、あぁぁああっ」

えるが甘い悲鳴をあげた。

立ったままの挿入は、角度がなかなか合わないが、捩じこむようにして挿入する。ツブツブの膣が、ペニスをみちみちと包んでくる。

「い、いや、きついです……ああっ」

えるは悲鳴をあげ腰をねじった。

片足立ちの不自由な大勢なので、自分から腰を回して角度を合わせることが上手く出来てない。そのとき、亀頭が真ん中の狭いところを通り抜け、子宮口を突きあげた。

「……ッ！」

えるは声もなくガクガクと震えた。

感じやすいところに受けた衝撃が、身体の芯をビリビリと貫いたからだ。電気に打たれたみたいに震えてしまう。立ったままでのセックスは、二人の身長差もあって、奥深くまで入ってくる。子宮が亀頭で押しあげられ、キュンキュンと甘く疼く。その衝撃は脳天まで届き、絶頂までたやすく昇っていく。

「ダメですッ！ イキそうですッ！ も、もう……、子宮が……ッ！」

プチSMが効いていて、えるの躰は容易く絶頂まで導いていく。内側から子宮を揺さぶられ、キュンキュンに発情していた。だから挿入だけでイキそうになっている。

「……ッ、し、締まるッ！」

えるの体を支えるのは、奉太郎が背中に回した腕とペニスだけだ。膣が締まって当然だった。

「あああッ！ だ、ダメッ、キツいですッ！」

自分の体重がかかっているぶん、正常位より深度がある。身体の芯を抉られている感覚に襲われる。

「あっ、だ、ダメですぅッ！」

えるは、その感覚から逃げようとしてつま先立ちになった。だがその姿勢は支えきれず、すぐに踵を落ち、亀頭はグリッと子宮を抉った。そのとき、目の裏でチカついていた電飾が、パーンと大きな音で弾けていく。重力がなくなったかのような浮遊感に浸される。

「イっちゃいますぅッ！」

「うっ、うぅぅ……、クッ」

奉太郎が呻く。ペニスがぬるぬると絡みついている膣ヒダが、捩れるように締まり、精液を吸い出そうとした。慌てて腰に力を込めてこらえる。さっき射精したばかりなのでやりすごすことができたものの、熱くたぎった膣ヒダは、溶けそうなほど気持ち良さだ。目の

前に目を閉じて口を半開きにして陶酔しているえるがいる。奉太郎は、えるの薄く開いた唇にキスをする。惚けているえるに構わず、自分の舌をえるの口腔内に侵入させ吸引し唾液を味わう。

「ん、んんッ」

まだ、惚けているえるに構わず、下から結合部を突き上げる。千反田の躰がブルブルと震えた。躰は反応しペニスを包むように子宮頸管粘液がドブリと出た。

「お、折木さん……？」

「あ、すまん……」

「まだ……、なんですね……」

奉太郎は、えるを見つめて頷いた。その意味を汲んだえるが微笑んだ。膣ヒダがキュキュうと締めつけてきた。えるが身体を奉太郎の方に押し付け、乳房が胸板に擦りつけられる。右足を高く上げ、奉太郎の腰に巻きついてくる。抱きうこうとしたが、手は縛られて動かせなかったので諦める。

奉太郎は、胸板に押し付けられている豊満な乳房を掴んだ。

「ああっ、ぁあッ。痺れますぅ」

胸板に押し付けるようにしてこねながら、人差し指と中指の付け根で乳首を挟み、ぎゅうぎゅうと揉む。

「あっ、ああっ、ひ、ひゃああッ！」

えるは小さな絶頂をいくつも極めているようで、肌を汗まみれにして悶えている。膝がガクッと緩み、えるの身体がぐっとさがった。

「あうぅっ……」

「おっと」

あわててお尻に手を回し、今にもへたりこみそうな彼女の身体を支える。

えるは痙攣をはじめた。

「いやあああぁッ！」

先ほど叩かれて敏感になっているお尻を掴まれてのだ。たまったものではなかった。

「痛いッ、いやですッ、か、感じますぅ！」

激痛の波に弄ばれて、えるはおろかな行動に出た。左足をあげて、奉太郎の背中に回してしまった。甘く痛い刺激の波から逃れようとした本能的な行動だった。

支えるものがなくなり、腰がガクンと落ちて、子宮が亀頭で押しあげられる。子宮頸管粘液がドブリと出た。乳房が奉太郎のシャツにこすられる。

「うあっ」

奉太郎が慌ててお尻の肉を掴んで揺すり上げる。勃起した秘芽が奉太郎の陰毛でザラリとこすられた。苦しいほどの快感なのに、奉太郎に抱きしめられていることがうれしくて、甘い満足感に包まれる。

「折木さん、すきぃ、大好き……です……」

奉太郎がしっかり抱きしめてくるから、なにも怖いものはない。寄せては返す波のように快感が次から次へとやってきて、波間に漂っているかのようだ。そのときとき、快感の大波がえるに向かって押し寄せてきた。目の前でまたたく光源が、大きくなり弾け散った。

「イッちゃうぅーッ！」

えるは、絶頂に押しあげられた。小さな波はいくつも押し寄せてきていたが、今回の絶頂は大きかった。両手を括られて吊られ、抱きつけない不安が、より刺激を深くしていた。

「うっ、ううっ、で、出るッ」

ついに射精が始まり呻く。

ドブッとあふれた精液を、子宮に収めようとして、膣ヒダがキュルキュルと締まる。真ん中の狭いところがよじれるように締まるのがたまらない。

ドクッ、ドクドクッ

溜まったものを思い切り吐き出す気持ちよさは最高だった。

えるを両手で支えなくてはいけないので大変だったが、それが奉太郎には喜びだった。

「あああッ、またイキますッ！」

えるは背筋を反らして硬直した。奉太郎はゆっくりとペニスを抜き、えるは両足を下ろした。そして、手首の紐をゆっくりと解く。えるが奉太郎に体重を預けぐったりとした。

「折木さん……、あったかい……です」

奉太郎は腕の中で力尽きている女の子を、しっかりと抱きしめた。

終幕

あとがき代りのスタッフの日常つーか、グチ

白朧　毎度お買い上げありがとうございます。
くろうさぎ　お買い上げありがとうございまッス。して、今回のタイトルは何コレ？
白朧　「拘束嬲裸」ですがなにか？
くろうさぎ　だから、なんでそんなタイトルなんだ。
白朧　ロマサガ2の斧技「高速ナブラ」が元だ。漢字はエロくしといた。ちょっろっと前にロマサガ2の実況動画みてたので。
流一本　＼アリだー／　アリの巣なら任せてくれ！
白朧　ロマサガは名言多いからな。「流し斬りが完全に入ったのに」とか「先帝の無念をはらす」とか。
流一本　やりこんだやりこんだ！
白朧　まぁ、あっしは10年以上放置してたけどな。ちなみに未クリア。
くろうさぎ　ロマサガはもういい。今回は氷菓なのか。表紙は入須先輩か。
白朧　京アニです。フルメタやってくれないかなぁ。ラストまで。
流一本　「中二病」もいいんだけどな。くみん先輩とか凸守とか。

12月某日
サバンナにて

奥付

発行　リーフパーティー
発行日　2012/12/31
発行人　くろうさぎ

ホームページアドレス
http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/

印刷所　大陽出版様

18歳未満の閲覧禁止・無断転載
インターネットなどへのアップロード及び公開の禁止

LeLeはつはぁ

Vol. 22